

ニューヨークに住む日本のごどもたち (3)

—「NYのごどもぐくに幼稚園」での学び—

鍋島 恵美

最終「魔女学校 修行 冬の巻」です。前回

は、「ハロウィーン」「サンクスギビング」というアメリカ文化のなかで生活することもとおとなの有り様を紹介しました。今回は、その続きの「クリスマス」の有り様と、現地校で学びだしたごどもぐくに幼稚園の卒園生の生活ぶりについて感じ

たこと考えたことを述べようと思います。

ハロウィーンでは不思議なことが起こりました。今回その不思議が続いたのです。

魔女からのお誘い サンタクロースと出会う
ある晩のこと私は、片づけをしていて机の後ろ

に物を落としてしまいました。取ろうとすると、一枚のオレンジ色の封筒が落ちていたのに気づきました。「なにかしら？」と拾ってみるとそこには魔女の絵が描かれているではありませんか！「えっ？ ひよっとして魔女からの手紙？」と、一瞬ギョッとしました。魔女学校修行の身である私です。魔女だと偽って教え子達には話していません。ひよっとして魔女の怒りにふれて本当の魔女になってしまふのでは……と言う思いが脳裏を走り、恐ろしくなつて毛布をかぶつてベットに潜り込みました。馬鹿げているのですが、そんな気分になってしまいました。しかし、このことだけは誰にも言えませんでした。

十二月の声を聞くある日の朝、幼稚園に出かけるのにエレベーターに乗り込むと、サンタクロースがいるではありませんか！ 真っ白のふわふわした髭に金の丸縁メガネの優しい笑顔、おながが

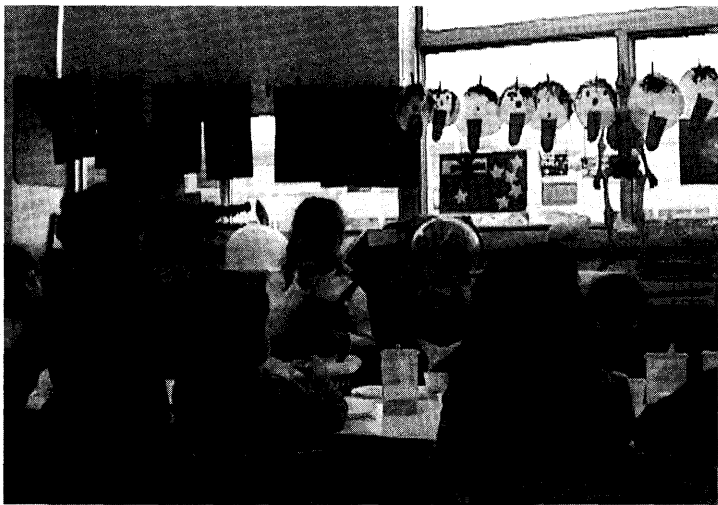
ぶくつと飛び出しているサンタのおじいさん。その人がいるではありませんか！ 「えっ！」思わず「Are you Santa Claus?」と尋ねそうになりましたが、慎みました。「サンタクロースに会えた」という胸の高鳴りは一人でもどめておけず、幼稚園に着くなりH先生やYさんに伝えると「ハハハハハ」の笑いと共に「サンタクロースを仕事にしている人なのよ」との言葉。サンタクロースが仕事になるキャラクターとはなかなかだと感心してしまいました。赤いTシャツにブルージーンズにサスペンダースタイルのサンタのおじいさんと「Good morning」と挨拶が交わせる日は何かいいことがありそうでウキウキしました。

ある現地校で生活することもち

H先生に送ってもらい八時三十分学校へ到着。受付で「A few minutes wait」と言われ待っ

ていると、T先生らしき日本婦人が現れ、挨拶を
交わし、先生の部屋で今日の打ち合わせをしまし
た。「校長には話してありますから、どこをごら
んになってもいいですよ」と、それぞれのクラス
を案内して先生に紹介してもらおうと、みなさん
「Sure」と、応じて下さった。

こどもの国の卒園児のN子とM子に出会う。二
人とも先生の話をよく聞いていておとなしいで
す。担任の先生が、私をこどもに紹介されると、
みんなは興味を持って私を見つめます。ジムの時
間でこどもは、担任の先生とアシスタントに付き
添われてジムまで行きます。そこで先生が代わ
り、ジムの先生とボール遊び(今)。ボールの扱い
の基礎を習います。先生の指示に従って動き、十
メートルほど先にひかれた線までボールが届くか
どうかだけのことで「キヤー」と歓声を上げま
す。こんなたわいもないことがおもしろいのかと



▲現地校の教室内（本文の学校ではありません）

思います。N子は、英語を聞いてわかるようですが、M子はわからず周囲のこどものしていることを見て理解している感じです。その洞察力も細かいたところまでは見えてない様子で大丈夫かと心配になります。二人に生気がありません。ところが……日本人のこどもが四人そろったESLの時間になり、先ほどのT先生の部屋に入ってきたとたん「ワァー」とにぎやかです。日本人の先生になり母語でしゃべれると元気はつらつになるのです。英語の学習場面ではできない自己主張と緊張感がほどけた瞬間なのでしょう。こういう日本人のこどもの様子は昔も今も変わらないようです。ここに住むこどもたちの苦勞を初めて実感として受け止めることができました。こどものくに幼稚園と同様に児童初期はT先生のような日本人でいてバイリンガルである方の存在が、親にもこどもにも大きいこともわかります。

大雪　そして　クリスマス

二〇〇三年十二月五日の朝、H先生から「休園です」との電話。「こっちは雪は降っていませんよ」と伝えると「すぐそこまで来ています」と「すぐそこまで」との確信めいたその言葉を不思議に思っていると、確かにまもなく雪が降り出し見る見るうちに積もっていきました。NYは大雪です。窓の外は、一面に雪景色です。そこには絵本でしか見たことの無かった情景が眼前に広がってきました。窓から雪の積もっていく様子をずっと見ていました。今は、それぞれの家庭の庭や玄関先は、クリスマスのデコレーションです。その飾り付けから出身国が分かるようです。帰り道に私を車に乗せ、デコレーションの美しい住宅街をYさんに案内してもらい楽しみました。真っ暗で積った雪がそのまま残るなかにイルミネーションの明かりがとる静かな情景です。日本のように



▲積った雪が残るなかにもイルミネーション

ジングルベルは鳴っていません。幼稚園に勤める若いY先生は、給料を張り込んで大きなもみの木に大好きなスノービーを飾ったことに大喜びでした。

ここにある もうひとつの幼児教育

大雪の翌日、雪に埋もれた車の雪かきをして、スリッパに注意しながら必死で運転してきた赴任して間もない若いK先生やN先生たち。夢を持った若い人が、憧れてきた大地で初めて出会う困難と格闘しながら生きているエネルギーを感じます。「毎日が刺激的で生きてるだけで精一杯です」とサラリーマンを退職して赴任したS先生の実感のこもった言葉の重みを感じます。まさに彼ら自身が、子どもを教育しながら、自分自身の生きる力を身に付けているような気がします。その生身の体験をぶつけていくこと自体に幼児教育の良さ

がここにあると考えられます。一方、子ども達は、日本にいる祖父母から、子ども向けテレビ番組を収録したVTRや、知育産業の教材を送ってもらおうようです。ちよつと過保護で過干渉な気がしてなりません。赴任期間の短い家族にとつては、子どもの帰国後の勉強が気になることもよく分かります。しかし、ここに日本語の幼稚園があり生活をするならば、あとは、NYの風土のなかで、豊かに生活を楽しむ、ここにしかない文化に浸つてもいいのではないのでしょうか？ 虚構の世界と現実が融合して存在する、雄大な自然に恵まれた異文化体験が、生きる力に必ずなつていくと考えるからです。今ある時間を大事にしてほしいと願います。そしてこの大地にある自由と責任の精神を日本に持ち帰つてほしいと思います。

私は、ここに住むみなさんの生き様にある優し

さしてもらいました。異文化の中での生活を通して立しサポートする姿勢にある優しさです。きっとさまざまなことの体験のなかで自ずと身に付けてこられたのだと思います。異文化の中で生きることものを幸せを願つて懸命に保育するみなさんのエネルギーをひしひしと感じています。長い教職の中で自分を再構築する貴重な実践的研究体験そのものでした。私にいろいろな機会を与えてくださったH先生や、みなさんに感謝して帰国の途に着きました。

私の魔女学校修行の巻は、終結の時を迎えました。

(京都教育大学附属幼稚園)